

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

太平洋戦争中の1942年、三重県で生まれた。父は陸軍南シナ海の戦地に建築技師として従軍、フィリピンで終戦を迎え、戦後遅く復員した。その頃、我が家は占領下の農地改革で20町歩の農地が2町歩に減歩され、口に入るものと言えばさつま芋や大根、大豆などしかなかった。こころした時代に求められる仕事と言えば、食物の確保と住まいの再建。父も農林業と社寺・和風建築業の「二足の草鞋」を履き、家族を養った。ただ、神社や庫裡などの設計は得意としていたが、商売は苦手だったようだ。

母屋は鈴鹿山麓にあった。農地と平原が広がり、四季の花や豊かな緑に囲まれていた。この恵まれた自然環境が建築家に必要な資質である大先輩として従軍、フィリピンで自然との一体観や、野山の四季の変化などを敏感に感じ取った。その頃、我が家は占領下の農地改革で20町歩の農地が2町歩に減歩され、口に入るものと言えばさつま芋や大根、大豆などしかなかった。こころした時代に求められる仕事と言えば、食物の確保と住まいの再建。父も農林業と社寺・和風建築業の「二足の草鞋」を履き、家族を養った。ただ、神社や庫裡などの設計は得意としていたが、商売は苦手だったようだ。

## 建築界に生きよ！ それは夢か希望か運命か

わなかった。私はその頃、遠からず訪れる農地の荒廃を予感し、農学者か、企業農家を夢見ていた。そのため、普通高校から大学の農学部への進学を志していた。ところが近くに住む伯父が「父親の仕事を忘れるな」と私に強く迫り、やむなく津工業高校建築科に進学。卒業後は地元に残る覚悟を決めた。

それが一変したのは高校3年生の夏。中学時代(三重大附中)の同窓会で、かつての級友たちが有名大学への進学を語っていた。これにショックを受け、高校の担当教師に自分も進学したいと告げた。その教師は驚くことに、その後すぐに父を訪ね、私の進学を進言。父は「家督を継ぐこと、浪人、留年は不可であること」を条件に進学を許した。担当教師がなぜ、父を説得してくれたのか、分からない。ただ、一つだけ考えられるのは高校2年生の秋に近畿工高校建築連盟主催のコンペで連盟賞を獲得したことだ。その後、大学に進学し、大学生の時もいくつかのコンペで賞を頂戴した。今思えば、こうしたコンペ入賞が「建築家への道を進め」という天命が下った瞬間だったのかもしれない。憧れの竹中工務店に入社できたのも、コンペに入賞した実績が評価されたのだから。

建築物はその時代を映し出すレガシー(遺産)となる。それだけに建築家は悩み、苦しみながら一つの作品を創り出す。建築家たちに過去を振り返ってもらいながら、どうして建築家を目指したのか、何を見つめ、何を考えながら創作活動をしてきたのか、執筆してもらいます。06年に「星ヶ丘テラス」でBCS賞を受賞した経験がある服部都市建築設計事務所の服部力会長にご登場頂いた。